

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	農業・食糧分野における国際協力で活躍出来る グローバル人材の育成	
学部・研究科名	農学部	
プログラム 実施期間	2017年8月14日～8月26日	
研修先(国・都市・施設名)	ネパール・ネパール農業研究評議会、マルファ村他	
参加者数　： 8名		知の森からの支援　： 2名
プログラム概要	農学部在学中に身に付けた専門知識と技術を海外(主に途上国)の現場において、どのように活かすことが出来るのか。今、世界で起こっている農業問題・食糧問題は、どのような農業環境と社会的構造の中で生じているのか。その問題の本質は何なのか。本プログラムは、信州大学農学部と学術交流協定を結んでいるネパール国農業省ネパール農業研究評議会の研究施設及びトリバン大学農学部(首都カトマンズ標高1350m)と標高2650mのヒマラヤの麓の村マルファを中心に実施する。ネパールという農業生物多様性の宝庫でありながら、脆弱な食糧生産体制のもとに人々が暮らす「開発途上国」において、約2週間の研修先での活動とその経験から、このような問いに対して、自身で考え、学ぶための機会を提供し、将来、国際協力分野で活躍するグローバル人材の育成を目指す。	

実施状況・成果

ネパールにおいて実施された本海外農業実習は今年で5回目を迎え、8名の学生が参加した。今回の実習では、まず、ムスタン郡コバン村の農業高校を訪問し、授業の様子を見学した後、生徒や教員との交流を図った。この学校は、JICA草の根技術協力支援型「ネパール農業高校の教育強化プロジェクト」の支援対象校でもあり、学生たちはJICAプロジェクトが現地でどのように進められているのかについても学習した。その後、信州大学農学部と地域連携協定を結んでいるマルファ村へ行き、ホームステイを実施し、農業や食文化に関するインタビューや情報収集を行った。初めは戸惑っていた学生も会話に慣れてくるに従い、出来る範囲でコミュニケーションを取りながら聞き取り調査を楽しんでいた様子だった。山岳地帯での研修を終えた後、ボカラにて日本から運んできた車椅子3台の贈呈式を行った。これは、昨年に続いて2回目になり、ネパールにおける障害者の現状を知る良い機会となっている。

カトマンズへ戻ってからは、これまでの実習で行ってきている野菜市場の調査及びスーパーマーケットの食品売り場調査を行い、両者の比較を行った。また、トリバン大学農学部を訪問し、大学案内をしてもらうとともに教員及び学生との交流を図った。この交流は、今年度から始まったものであり、今後、同大学農学部とは学術交流協定を結ぶ準備を進めていることから、来年度以降も本実習プログラムにおいて学部間の交流を積極的に進めたいと考えている。ネパール農業省ネパール農業研究評議会ジーンバンクの訪問では、ネパール人研修者からネパールの植物遺伝資源に関する講義を受けた他、施設を案内してもらい、ネパールにおける研究環境の現状を知ることが出来た。

今年度の実習期間は8月中に設定したためネパールではまだ完全には雨期が明けきっておらず、曇りもしくは雨の日が多かった。例年だとボカラやマルファで綺麗なヒマラヤを見ることが出来るのだが、残念なことに今回参加した学生は、一度もヒマラヤを見ることなく帰国することになってしまったのでした。

学生の声①-農学部　学生

ネパールでの生活はトイレや食事など、日本のようにはいかない場面が多々ありました。しかし、言い換えれば、毎日が新鮮なことばかりで飽きることがなく、工夫を重ねることで快適に過ごすこともできました。実習で得たことは、苦手なことほどまずやってみることです。私は英語にとてつもない苦手意識を持っており、海外実習など不可能と思っていましたが、実際に英語を使わねばならない状況に身を置いてみると、思いのほか難しいことではないと思うようになりました。実際に英語を話す場面では苦い思いもたくさんしましたが、その分、これからの目標ができ、英語に取り組もうという意欲も出てきました。

学生の声②-農学部　学生

ネパールは全体的に非常に過ごしやすく、特にマルファ村やコバン村では設備等は日本ほど良くはありませんが、そのことがどうでもよくなってしまいうほど、生活するのには素晴らしい場所でした。今回の実習に行く前は、英語で誰かとコミュニケーションを取ることに對してかなりの抵抗感がありましたが、英語で話が通じたときの喜びは大きく、最後の方は抵抗感が感じられなくなりました。ネパールの学生は勉強に対して非常に熱心であり、自分もその姿勢を見習わなければいけないと感じました。

ネパール農業省ネパール農業研究評議会の前で



マルファ村の様子

